
魔物勇者

朝倉 南

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔物勇者

【Nコード】

N4626Z

【作者名】

朝倉 南

【あらすじ】

人と魔物が共存する世界。
スケルトンとしてよみがえった彼の過去は？
そして何故彼は勇者なのか。
悲しいような、爽やかに終わるようなそんな物語。

初小説なので色々おかしいところがあると思います。批評、感想、気づいたことなにかありましたら是非、感想の方に宜しくお願いいたします。

おはよう

色んな勇者がいる。

おっさんや青年、少年、女勇者、おばさん・・・はきいたことがないな。

今回のお話は普通の人間が勇者ではない物語。

そう、一匹の魔物が織りなす物語。

勇者は人間がなるものだ。それが普通の物語の定番だし、よほどのことがない限り例外は生まれない。では何故この世界では魔物が勇者なのか。

それは・・・この世界で僕たちが戦う相手は、神だから。

「おはよう。今日もいい朝だね。」

答える人はいない。

「今日も誰も返事してくれないか。というか僕以外は多分もう起きないのかな。」

骸骨は墓場に向かって喋った。

棺桶から体を起こし墓に呼びかける姿は普通の世界の人なら恐怖を覚えるだろう。

「まあ仕方ないか。さて、今日も仕事に行きますか。」

この世界では魔物が人間と一緒に生活している。何故かって？

人が死ねば魔物になるか植物になるか動物になるかの三択。

魔物が死ねば人間か鉱物か霊体になるかの三択だ。

動物や鉱物、植物は物質としての活動を終わると同時に霊体となる。霊体は、何にでもなれる代わりに前世の記憶をすべて失うことになる。

魂に記憶が憑きすぎるとその情報に新しく生まれた命が耐えきれないからだ。

では魔物と人間はどうか。

人間から魔物、魔物から人間の転生は記憶の継承が認められている。理由は魔物と人間で争うことをなくすため。

知性の高い異形の者同士は、どうやっても争う運命にある。

しかしもし争う相手が自分の肉親だったかもしれないならば？

自分と親しかった者だったならば？

その知性が足かせとなり彼らはお互いに手を出さないこと、転生者の情報を共有することで、家族がいた者が転生した場合元の家族のもとへ帰すこと等が定められた。

これらの法律から同じ家に人間と魔物が住むことは普通であり、転生後の過ごし方を考える爺さん婆さんもよくあることだ。

さて、一見平和なこの世界だが、そうでもない。魔物から人間、人間から魔物を繰り返す者は確率としては低いがそれでも長い年月をかければ存在する。

そんな奴は高い知性を持ち、やがては神のまねごとをし始める。それを神が見過ごすかと言われればそんなことはあり得ない。

魂のサイクルの正常化、イレギュラーの排除の為、一定の期間が過ぎれば神は人間と魔物を殺しに来るのだ。

スパンとしては約30年に一度。今回は37回目。人魔歴1111年。

生きていれば僕の妹は11歳で、人間になっているはずだった。

こんにちは

「こんにちは」

「やあ、グレン。今日は何のようだい？」

武器屋の店主と骸骨が話している。

「武器を新調したくて。この前の闘技場での戦いで折れてしまって。」

「そうか。じゃあ頑丈そうなを持ってくるよ。ちょっと待っていてくれ。」

ふう。と骸骨はため息をつく。それは周りの視線が気になっていたからだ。

この世界、確かに人と魔物は共存している。しかし全く差別がないかというところでもないのだ。

「まあ、人間だったころの僕も骸骨が歩いてたら気になってただろうしね。」

魔物には色々な種族がある。基本的にみな人語を解するのは一緒ではあるが、容姿に関しては千差万別である。

いわゆるヴァンパイア、ワーウルフ、サキュバス、マーメイド、スケルトン、ミノタウロス、の比較的人間に近い亜人6種族。

次にスライム、キマイラ、トレント、触手、クラーケン、ゴブリンの人間から遠ざかった非亜人6種族。

基本はこの12種族だがまれに強い力を持った魔物が生まれる時が

ある。

人間の場合は勇者や魔法使いなど何らかの適性を持った人間が生まれるわけだが。

さて、人間同士でも顔のパーツがちよつと違うだけで美人だぶずだ、気持ち悪いだかつこいいだ言われるわけである。

どうしても人間は比較をすることが好きなようだ。

転生者が亞人6種族ならまだしも、非亞人6種族なら元家族でも受け入れてくれないことがままあるのだ。

へたをすると亞人6種族の中でもスケルトンやミノタウロスは受け入れられないこともある。

ヴァンパイアやサキュバス、マーメイド等は人気のようだ。

まあ、男のマーメイドは一部の人間を除いてお断りのようだが。

さて、話を戻そう。

この世界では人間のコミュニティ、魔物のコミュニティ、人魔のコミュニティと各都市には三つのコミュニティがある。

規模の小さな村などはほぼ人魔のコミュニティといていいが、人口の大きい都市ではある程度コミュニティを分けた方が都合がいいのだ。

転生を行ったものなら最初から人魔コミュで生きていくことは可能だろう。

しかしまっさらの状態で生まれた者は、ある程度理解を深めてからでないと交流は難しい。

特に子供のころは自分と少し違うだけで、同じ種族同士でもいじめという名の排除行為を行うため、お互いの為にも子供同士での交流は出来るなら避けた方がいいのだ。

「おい、こんなもんでいいか？」

ふと店主の声で現実に戻される。

持ってきてくれた武器を眺めてみるが、手持ちと相談するといわゆる叩いて使う鉄の剣しか買えなさそうだ。

「この剣はいくら？」

「400ルドラ。お前なら350で売ってもいいよ。」

「じゃあこれで。銅貨しかないから35枚になるけど」

「あいよ。今度からは銀貨も用意してくれると助かるな」

「稼げるようになったらね。それじゃまた。」

骸骨・・・グレンは店を後にした。その足で向かったのはギルド。ちよつとした依頼で日銭を稼ぎ、夜は棺桶で眠るのが彼のスケルトンになってからの日課だった。

こんばんわ

「こんばんわ」

女が薄暗くなつた墓場で骸骨に話しかける。

「こんばんわ。こんな時間に墓場へようこそ。でももう暗いし、危ないから帰った方がいいよ。」

そうね。と女は言う。二人はどこことなく親しげな雰囲気だが、家族や恋人のそれとは違うことを物語る距離感で話している。

「まあこんな時間にわざわざ来てくれたんだ。妹がらみの話かな？ エレナ」

「正解。どうやら街で11か12歳くらいの女の子がふらふらしてるのを何人かが見かけてるらしいわよ。」

「そうか。いつも情報ありがとう。」

「いいえ。私にとってもあの子は大事な子だもの。」

あの子、グレンの妹は名前をリーンという。グレンの家族は父に母、妹のリーンの四人家族だった。父は子供たちが生まれてから転生し、ヴァンパイアとなり、母とグレンが人間、リーンがサキュバスとして生まれた。

ちなみにリーンは本当の家族ではあるが、ある意味本当の家族ではない。人間から転生した魔物は他の人間の腹を借りることで生まれ、魔物から転生した人間は魔物の卵から生まれるのだ。

つまりリーンは転生者。

本当の家族がいるかもしれないのだが、残念ながら彼女の一家はすでに死亡し、誰も転生届が出ていなかったことからもう身寄りがないと判断されたのだ。

そして身寄りのないリーンを引き取る形でグレンの家族は形成されたのだ。

エレナとリーンの関係は友達だったらしい。

グレンはリーンが生まれたころには15歳。彼女が物心つくころにはすでに働いていたため、彼女の交友関係までは把握していなかった。

だが人魔歴1100年。11年前の1月1日。あの日、グレンはエレナと知り合うこととなる。

妹が死んだ日。

いや、家族が死んだ日に。

- - - 人魔歴1100年1月1日 - - -

この日グレンはギルドの依頼を受け、狩りに出かけていた。獲物はサーベルタイガー。

近隣の家畜を殺しているとの通報を受け、討伐隊に加わる形で参加していた。

パーティーは4体。グレンにサキュバスの女、スライム、僧侶の男だ。

基本的に人間がギルドの依頼を受けることは少ない。

何故なら勇者、戦士、魔法使いのメイン3職に対し、商人、盗賊、遊び人、踊り子、僧侶のサポート5職の数の方が圧倒的に多いからだ。

人間によく発現する適正は商人。

これは道具屋、武器屋、防具屋、宿屋、飲食店などで働く際に有利になる適正だ。

ちなみに職業レベルのシステムはギルドから適正職に合った依頼を受けることでギルドポイントがたまり、認定を受けることで職業のレベルが上がっていくシステムだ。

ちなみに各職ともに最大レベルは？、最小レベルは？となっている。ちなみに魔物は普通は職適性が発現することはない。

ごく稀に生まれる異端種が人間の勇者や魔法使いみたいなものであり、そもそも魔物自体に人間にはない力や魔法を使えるなどの能力があるため、素の能力自体が適性のようなものだ。

もちろん個体によって能力差はあり、人間魔物ともに鍛えれば能力値は増加する。

ただし明確に数値化することは難しいため、この魔法がどのくらい使えればこの魔法が放てるとか、この技が撃てるようになったら次はあの技を覚える一歩手前ぐらいだな程度の概算でしか能力は測れない。

基本的に人間の方が基礎能力は低めではあるが成長速度は早め、魔物は基本能力は高いが成長は遅めという感じになっている。

特に亜人6種族は成長が人間より2倍ほど遅く、非亜人6種族は人間より1.5倍程度の遅さで成長するといった感じだろうか。

例外として異端種は成長しない。

これは生まれたときから何らかの能力が限界値まであることと、他の能力値も高いことから成長すれば神ですら殺せる可能性があるため神によってロックをかけられていることが原因だ。

グレンの過去

さてグレンは勇者レベル？であった。26歳という年齢にしてはレベルが低い方だが、それは彼が討伐系の依頼を受けなかったためである。

彼にとってナウマンゾウやらレッサーアリゲーター、タイガーオールカ等の危険な動物を狩ることはあまり魅力的に感じなかったのだ。そんなことよりも、困っている人の為に薬草をとってきたり、鉱物をとってきたり、遺跡の発掘の護衛、盗賊退治等の方が直接助けた人の顔が見れるからいいと思っていた。

優しい、というのは違うかもしれない。

どちらかというと彼は臆病といった方が正しい。彼は死ぬことを異常に恐れていたからだ。

この世界では死が直接存在の消滅というわけではない。

魂そのものは消滅しないが、魂のラベルに書かれたもの、いわゆる記憶が無くなるだけである。

さらには魔族が人間に生まれれば、あと一回は記憶を保ったまま新しい人生を送れる可能性が3割もある。

もちろんそれを何回か繰り返す可能性もあるわけで、この世界の死生観はある程度あっさり死を受け入れるのが一般的なのだ。

もう一つの要因としては、神による30年に一度の虐殺があるからなのだが。

さて話を戻そう。グレンたちがサーベルタイガーを狩っている時、世界各地ではお祭りが行われていた。

新年の祝い、新しい100年が始まる祝賀祭である。

こんなときにわざわざ狩りに行かなくてもと思うかもしれない。しかしこういう行事などで人が少ないときの依頼はポイントが増える

のだ。

国家を挙げての行事中の場合は3倍、都市での行事は2倍、市町村単位では1.5倍、と行事を楽しめない者への救済措置といった形でポイントアップが行われていた。

ちなみに魔物に対しては単純に報奨金が上記と同じように増えることで対応している。

こういうときにちゃっかり資産を増やして余生と転生後の人生に備えて、転生後に豪遊する元魔物なんてのもよく聞く話だ。

今回のお祭りは国家単位。ポイント3倍デーだ。こんなときにサーベルタイガーを狩れば少なくとも1レベルアップ程度のギルドポイントはたまるだろう。

「さて、そろそろ報告があつた場所の近くだけど」

「そうねー、やられる前にヤルのが私のポリシーだから身を隠して先制のチャンスを待ちたいわね。」

「こちらはいつでも大丈夫です。回復魔法はガンガン使うので安心して戦ってください。・・・僕に攻撃が当たらない範囲で。」

「サポートは任せてねえ。補助魔法なら掛けられるからあ。」

グレンはこのパーティーなら勝てそうだと思っていた。

少なくとも昔組んだグレン 盗賊 商人 踊り子のパーティーより何倍も安心して後ろを任せられそうだったからだ。

誤解しないように言っておくと昔の依頼は薬草摘みの依頼だったし、危険度は少ないものだった。

運がなかったと言えるのは、盗賊がサーベルタイガーの巣に子供が一匹取り残されているのを見つけ、連れ帰ろうとしたのを親に見つかってしまったことだろう。

サーベルタイガーの子供は子供のころから懷けば危害を加えてこないことから高値でペットとして売られていた。

そんなおいしいものが目の前に転がっていれば殆どの人が手を出してしまうだろう。

結果としては盗賊が死亡、商人は片腕を失い、グレンと踊り子が軽傷で済んだ。

当時はグレンが駆け出したったのもあるが、何より回復できる人間がいないため本来なら軽傷で済む傷が致命傷になりかねない状況だった。

そんなトラウマのあるサーベルタイガーに挑むわけだが、僧侶の回復、サキュバスの魔法攻撃、スライムの補助といったサポートがあるため当時よりは勝つ見込みが十分にあった。

グレンの過去2

「じゃあ、あの草むらで待ち構えるとしますか。」

「そうねー、周りも見渡せるしいいんじゃないかしらん」

「私は皆さんの後ろを警戒しておきます。」

「ぼくはあ補助魔法が切れないようにかけなおしするねー」

「しかし、変ですね。」

「ん・・・何が？」

「他の動物が一匹もない。家畜を襲うことはあっても、ある程度の強さを持つ動物ならサーベルタイガーは襲わないはずなのに」

「たしかにい　なんかへんだねえ」

違和感があった。だが気づかないふりをしていたのかもしれない。
僕たちの町の方から轟音が鳴り響くのを聞くその時まで。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

城下街サウスター

この街はグレンとその家族が住む街だ。

規模は住民約5万人程度で比較的大規模な都市である。

この街に災いが起こった人魔歴1100年1月1日。生き残った者は約100体。

殆どがギルドの依頼を受け街の外に出ていた者たちである。

グレンも災いが起こった時点では生き残っていた者の一人である。しかし結果的に彼はこの日命を落とすことになる。

何故なら災いは神が起こしたものであり、グレンはその神に立ち向かってしまったから。

街の方から轟音が轟いた時、四人は何か起こったかわからなかった。爆発か？花火でも暴発したのか？スライムが遠視の補助魔法で見える。

「あ・・・あああ　なんでえ・・・？」

「どうしたの？落ち着いて、どうなってるのかおしえて」

「街があ・・・壊されてる・・・かみさまにい・・・」

「！！！！」

「ウソでしょう？この前の聖掃は19年前。まだ11年も猶予があるはず。何かの間違いだ。」

「じゃああ自分の目でたしかめてみてよう・・・いーぐるあい！」

「ええそうさせてもらいま・・・」

「僧侶さん？」

「・・・早く戻りましょう。もしかしたらまだ救える命もあるかもしれない。神に仕える身ですが、今回ばかりは神様に逆らわざるを得ませんね。」

訳がわからなかった。前回の聖掃、つまり神による人間と魔物の強制的な転生を促すための虐殺は19年前に行われたばかりだ。

その時グレンは7歳。聖掃は事前に神によって通告されるため無差別な虐殺というわけではない。

だが、幼いグレンの目には神によって殺される人々の姿が鮮明に焼き付いていた。

またあんな非道なことを繰り返すのか。

何回繰り返したら気がすむんだ、今の神は。

グレンは心の中でつぶやく。

それよりも家族は大丈夫だろうか。お父さんもお母さんも、リーンも無事であればよいが。

その期待は一時間もせずに打ち砕かれることになる。

街に戻り、家の前に立っていたグレンは無残な家の残骸と、がれきの下から流れ出る血、そして神々しい光を放っている神を同時に見ていた。

「お前はこの家の家族か？」

「そうだ。だが、もう11年は猶予があったはずだ。なぜ殺した？」

「この街の住民に異常な魂をもつものがいたからだ。今まで発見できなかったのが不思議なくらいだが、経験、知識、ともに10回は転生しないと得られないレベルの量があった。」

「その誰かわからないやつを殺すためにうちの家族を、街のみんなを殺したのか？」

「ああ。いずれ私を脅かす存在なら早めに摘んでおくのがまっとうな考え方だろう？」

グレンは次の瞬間何も言わず切りかかっていた。

「人間と魔物がいくら私を攻撃しようとも、まず障壁に阻まれる。いままでの戦いの中で早いうちに理解していたと思っていたのだから。」

言葉通りグレンの攻撃は障壁に阻まれる。

薄い透明の膜が攻撃された部分だけクモの巣のように可視化する。

「1000年も戦っていれば無駄だと理解しておとなしく殺されるものがほとんどだったのだから。勇気だけは買ってやる・・・！？」

ピシツツ・・・ピキ・・・

「障壁にひびを入れられるとは久しぶりだが・・・だがどうしてひびを入れられる？少なくともお前のレベルでは無理なはずだが。」

「理由は今は答えられないよ。お前を殺した後でならたっぷり喋ってあげるけどねっつっ」

パキン・・・と甲高い音を出して障壁は破れた。

神にとっては二度目の事であるがあまりに昔の事なので一度目が誰だったかを瞬時に思い出すことは出来なかった。

過去編終了　そして現在へ

「もしや、お前・・・」

神はつぶやく。

可能性は二つしか思い浮かばない。

久しぶりに負わされた切り傷と、痛みによって冴えわたる思考回路から導き出される答えは・・・

「お前、元神か？それとも無限転生者か？」

「どっちかはあたり。まあどっちでもいいと思うけどね。」

この世界の神は最初から今の神だったわけではない。人か魔物かが神を殺した場合、殺した者が新しい神の座に就くのだ。

ちなみにその際、この世界の新しいルールを一回だけ決めることが出来るようになっていた。

今の世界、人間と魔物が転生できるようにしたのは今グレンが切りかかっている神によって行われた事である。

その前の世界では人間と魔物は争い続けていた。

その世界を変えようとし、神に挑み、殺し、座を奪い取ったのが今の神なのだ。

「少なくとも私が今作っている世界の方が、前の神の世界よりいいと思うがな。この世界の住民同士の争いは少なくなってるはずだろっ?。」

「その点は確かにね、でも差別はなくなっていない。むしろ争いに

よる死の方が差別による慢性的な苦しみよりも苦痛は少ないと思うよ。」

「命あつてこそそういった苦しみも、悲しみも、怒りも、喜びも、楽しみも感じられるのだらう。それを貴様は否定するのか？」

「否定はしないよ。ただもつといいやり方があるんじゃないか？人も魔物も寿命をまっとうできるような。それに転生できることで命を粗末に扱うものも増えているしね。」

会話しながらも戦いの手は緩めない。

グレンの剣は高価なものではなかったが、強化魔法によって一時的に攻撃力を倍増させていた。

この世界で強化魔法を使うのは異端種かレベルマックスの魔法使いぐらいである。

それに加えて自動回復魔法、時間操作による攻撃の回避など並みの勇者が使用できる魔法の範囲を超えていた。

現神とて負けてはいない。

勇者が使える魔法のうち習得していない魔法はない。

ただ人であつたころの名残から剣や打撃の方が得意ではあつた。

もちろん彼も元勇者である。

「強いな。だが私とて引くわけにはいかんさ。自分の理想とした世界を運営しているんだ。半端な気持ちで神などになつたわけではないッッ」

「そうだね。それはわかるよ。でも、僕の家族を、みんなを殺した罪は償ってもらふ。」

両者に魔力が集まっていくな。グレンは火水雷の三大属性の魔法を練

りこみ、両手に集めていく。神は光闇無の単体魔法を連続で放つ構えだ。

次の瞬間、グレンは地に倒れていた。

神の魔法が当たったわけではない。

倒れる瞬間に見た光景は、自分の胸から剣がまるで生えているかのように刺さっている映像。

神が放った魔法ではないことは神自身が驚いていることからわかる。

どうやら後ろを振り向く余裕はなさそうだ。

いったい誰が僕を殺したんだろう。

その疑問を胸にグレンは意識を失った。

こうしてグレンは神に破れ、人としての命を終えることになったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4626z/>

魔物勇者

2011年12月16日21時58分発行